

刈羽村刈羽(稲場)地区における液状化等による建物・宅地被害の再建課題

新潟大学災害復興科学センター

福留邦洋

JR 刈羽駅西側の砂丘末端部に位置する刈羽(稲場)地区は、2004 年新潟県中越地震(以下、中越地震)において建物被害が発生した地域である。7 月 25 日に行った現地調査では、今回の新潟県中越沖地震(以下、中越沖地震)においても液状化による地すべりで大きな被害が発生していることが確認された(被害のしくみ等は報告「刈羽地区の液状化による建物・宅地被害」を参照されたい)。2004 年の中越地震の被害調査結果と今回の中越沖地震の被害との比較から明らかになった傾向と課題は次の通りである。

繰り返された被害箇所

道路の亀裂、塀の崩壊など中越地震において発生した場所において、今回も同様に亀裂、崩壊の発生していることが確認された。転倒、崩壊した石塀、ブロック塀については、必要な鉄筋や背後からの補強壁などがなく基準を満たさないつくりであり、前回の中越地震の経験・教訓が必ずしも生かされていないことがうかがわれた。1978 年の宮城沖地震等ブロック塀の問題は指摘されているにもかかわらず、直近の被災地でもあまり改善がみられないことは、建物本体だけでなく外塀についても基準を満たすものがつくられるよう政策誘導等インセンティブを与える必要があると考える。外塀、門柱等の転倒・崩壊は、通行人への凶器となり、道路閉塞にもつながることから公的な助成等に関する議論も可能と思われる。

一方、住宅については中越地震を契機に大幅に補強されたものがみられ、一部の作業小屋などを除いて原型をとどめない層破壊のような住宅被害はみられなかった(注:ただし地盤災害等による建物の傾斜、不同沈下等により罹災証明で全壊になると思われる建物は存在する)。再建した住宅が再度地すべりによって大きな被害を受けた箇所もあるが、一方で、地区の被災住民から中越地震により住宅改修したことが被害の拡大を防げたのではないかという声も聞かれた。前回よりも強い揺れに見舞われたものの、中越地震の経験が生命を奪うような住宅被害を防いだとみることができよう。

多重ローンの懸念

当該地域では、中越地震により被災し、新築や大規模な改修を行うことにより住宅再建した事例が散見される。この過程において、住宅再建に関するいわゆる二重ローンを抱える世帯が発生したと思われるが、今回の被災で場合によっては三重ローンになる可能性も懸念される。中越地震に際しては復興基金から被災者住宅復興資金利子補給等が実施されているものの、二度の震災で多重ローンになる世帯に対しては利子分について全額補給を行ったり、限度額を上げるなど無利子資金枠を拡大することが求められる。住宅再建の意欲があるにもかかわらず、多重ローンの問題から再建をあきらめ、復興公営住宅等への入居となることは、被災者自身の生活再建、地域コミュニティ、長期的な行政負担等から可能な限り避けるべきと考える。

現地住宅再建について

砂丘末端部に位置する住宅について現地で再建を行う場合は、大規模な地盤改良等が不可欠になる。砂丘部末端は複数の箇所では地すべりや亀裂がみられるため、個別の宅地内における地盤改良だけでなく、丘陵の斜面全体に関して抜本的な対策を講じる必要があるかもしれない。このような条件において中越地震後と同レベルの基礎等住宅再建では根本的な安全性が担保されることが難しく、移転再建も選択肢として検討すると思われる。一方で現地再建にこだわる世帯も存在する可能性がある。現地再建においては最低限の安全性を確保することはいうまでもないが、中越地震における小千谷市東山地域等でみられた防災集団移転促進事業の弾力的な運用等を生かして、移転希望者に対しては費用負担の軽減等を含めて円滑に再建が進むよう方策検討されることを期待したい。